

領域境界論 —境界の中に棲むという提案—

2年の修士活動におけるプロジェクトから境界を領域と捉える実践と設計手法の抽出を行い、2つの住宅を提案する。これらは境界に建ち、そこに領域を生み出す。概念としての境界を実態としての領域として設計にフィードバックし続けることで、都市に新たな関わりとしてのインターフェースを創出する設計手法をここに提案する。

1. 境界の中に現れる領域

地図上では1本の線として表記される国境がもつ領域性は、境界という概念が持つ記号性とその実際の想像させる。本研究は境界がもつ領域性に着目して都市に新たなインターフェースを創出するデザインを「領域境界論」として検討するものである。

韓国と北朝鮮の間にある国境のことを「南北軍事境界線」「38度線」と呼ぶ。ここは1953年に両国間で3年間続いた奇麗な戦争の休戦協定の一環として作られた。双方に2キロ後退された幅約4キロ、全長約250キロの鉄条網に囲まれた非武装地帯という領域が広がっている。両国は休戦中でありながらも睨みあい、世界で最も兵士と火砲が集中している場所の1つとして知られている。非武装地帯の領域には数千もの地雷が設置されており、通常では立ち入りは困難な場所である。人が訪れず、開発もされない地域では野生のタンチョウやマナヅルなどの絶滅が懸念されている鳥類の野生保護区のようになっている。韓国の報告では6000種を超える動植物が確認されており、絶滅の恐れや保護が必要とされる106種の動植物が含まれていることも分かった。人間が気軽に踏み込めない領域ゆえ、緩衝地帯には野生生物が生息する豊かな生態系が展開しているという。



2. 三つの試作

本章では修士活動の中で行ってきた3つのプロジェクトを本研究における設計の試作段階として位置づけ記述する。

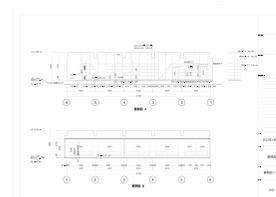
3-1.Shelf Wall

大学建築学部デザインコンモンス

撤去することのできない構造壁を中心に両サイド45°に天井を切り上げて、制作スタジオが持つ空間のラフさと落ち着いた学修空間を共存させた。

性質の異なるふたつの領域間で領域を有する境界として棚を挿入した。制作スペースやメインタナススペースの持つラフな雰囲気を持った先行事例を参照し、この棚はヒノキ60mm角材とタモ集成板を組み合わせて自立し、道具を置く棚や作業机、キャットウォークや階段として機能させている。

1 Floor
2 2階空間



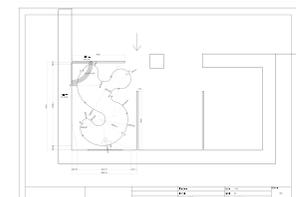
新築ではなく改修工事のため撤去できない部分とできる部分が混在した空間での設計は、2つの性質の異なる領域を棚という小さな領域を持ち合わせた家具を挿入することでラフさはありながら、制作に集中できるスペースの実現を目指している。建築の壁という境界に対して棚を挿入することで、領域境界と呼べる領域が生まれ、またこの領域がキャットウォークなどに変化して、空間を構成している。このインテリアを差し込みを設計に展開することのできる手法として抽出する。

3-2.Ribbon

リボンパーテーションによる会場構成

空間内のリボンは平面的に3つにくびれながら流動的に円形となっており、曲率や位置は壁面にある展示物との関係を元に設計している。ひとつの壁にリボンが接近することで壁面は繋がったまま、展示のパネルは2種類の違った内容を展示し、リボンによって仕切られている。

1 Floor
2 2階空間



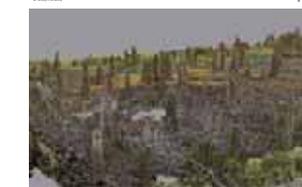
本設計では数年にわたるプロジェクトを一つの空間内で展示する展示計画を行った。本設計では空間内にリボンを垂らして、壁面とリボンの間に小さな領域を作り出している。リボンは空間内で1周しており、リボンの中からリボンに描かれた文字や写真を見ていくことで、プロジェクトの流れを理解することができる。リボンの下は人が行き来できるが、リボンが空間を緩やかに分け、名前のないが確かに少し違う領域が生まれている。

3-3.Scan

敷地のスキャン

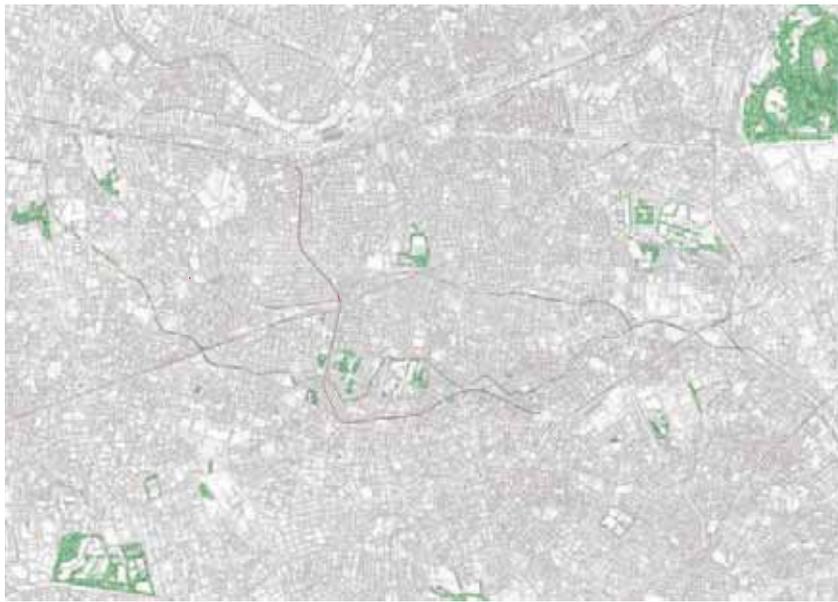
敷地の持つ複雑性を図面化する方法としてiPhoneに搭載されているLiDARセンサーを利用した環境のサーフェススキャンを行った。LiDARスキャンは光の反射を読み取って物体を3次元的に捉える技術であり、最近では中銀カプセルタワービルなど失われゆく建築資産をデータ化する際などに活用される技術である。

1 00
2 000m



敷地のスキャンは敷地の複雑性を直接取り込み、抽象化しないでデータ化できる方法でありながら調べることが可能になる。複雑な敷地のデータ化は設計検討時に現地の様子を確認する術になった。しかし、抽象化しない方法は情報が多く、設計検討の妨げになる場面もあり、抽象化してないデータをどう読み解くのかは今後の課題である。敷地の複雑性を読み解く手段の1つとして、スキャン技術を設計手法として抽出する。

3. 敷地



都市の中には多くの境界が存在している。これを分析し インフラの境界、地形の境界、行政上の境界とした。インフラの境界は道路や線路によってできる境界であり、街を大きく分断するものである。地形の境界は川や崖といった自然の状態によって生まれる境界であり、本論では川を暗渠化した緑道や公園も地形による境界とする。行政上の境界は と以外の境界であり、明確な見える境界はないが行政や話し合いによって決められて境界を指す。国境や県境などであり、用途地域などの全く見えないものことも指す。

Setagaya
世田谷

Site
配置図



3. 二つの敷地

Site-A

東京都世田谷区の三軒茶屋駅と下高井戸駅を結ぶ東急世田谷線沿線の山下駅付近の350㎡の区画を敷地 (site-A) と設定する。羽木公園や豪徳寺、北沢川緑道があり、また豪徳寺町と宮坂町、赤堤町の町境にまたがり前述の3つの境界性をひとつにまとめたよ

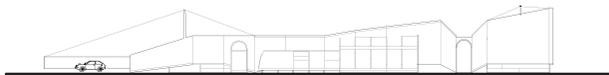


Site-B

東京都世田谷区の小田急線経堂駅から伸びるすずらん通り商店街の終端に近い230㎡の区画を敷地 (site-B) と設定する。商店街は経堂小学校の通学路でもある。この敷地は商店街側と裏の住宅地側で敷地内にふたつの用途地域 (近隣商業地域と第一種低層住居専用地域) の境界をもつ敷地である。



Site-A 境界に沿う家



世田谷線沿線のゆるくカーブする敷地 (site-A) にアト

リエを併設する住宅と、駅の待合スペースを兼ねたカフェの複合建築を提案した。アトリエとカフェは建築の都市への構えとしてプログラムと空間を都市にひらく。

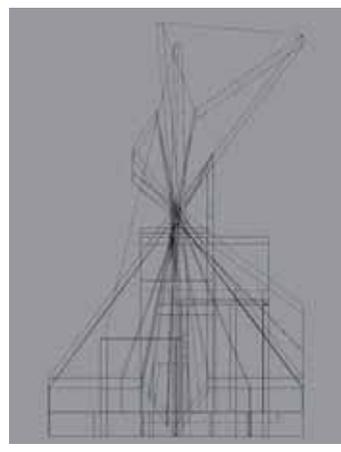
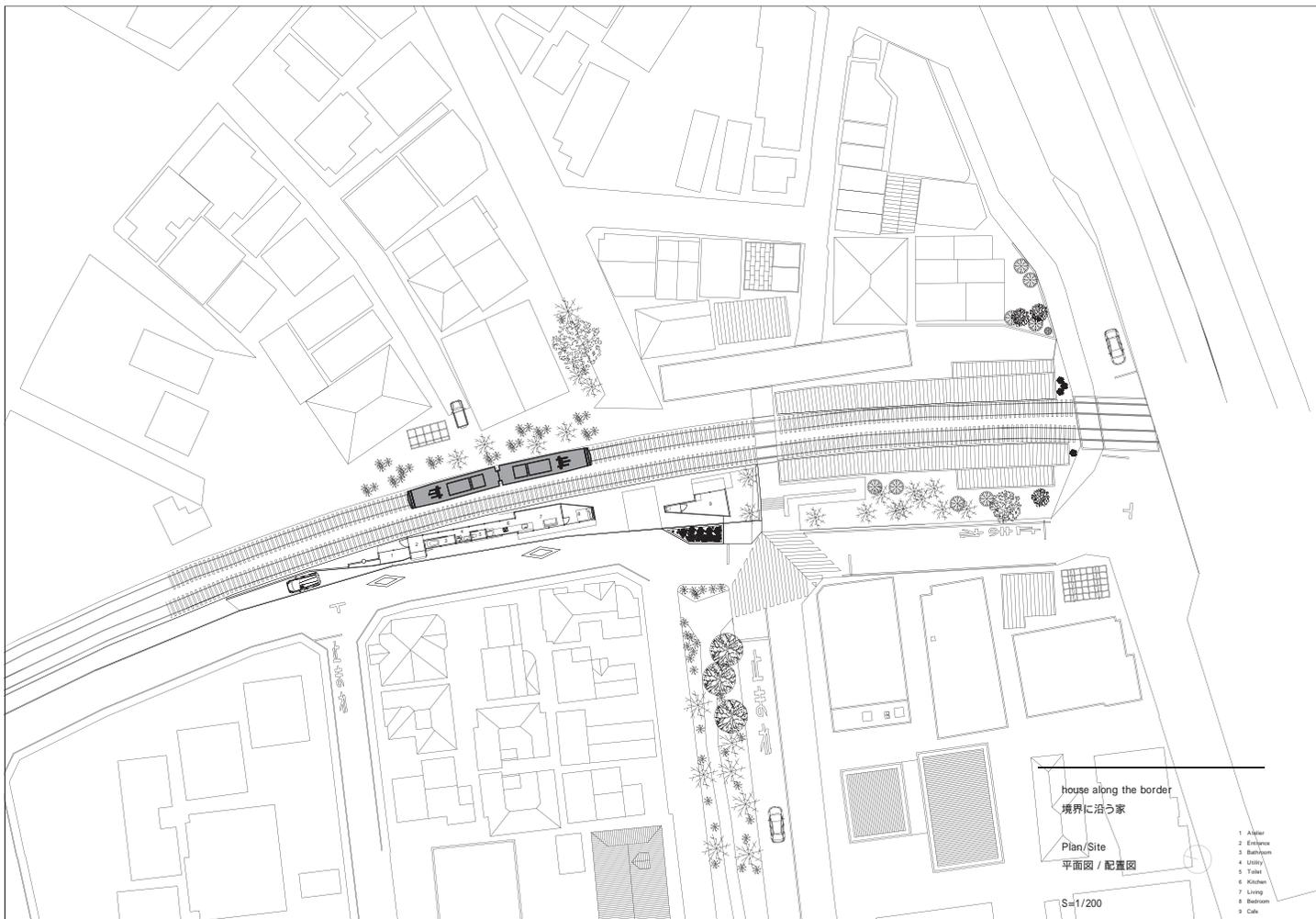
棟木を敷地の軸に沿わせて通り、垂木を両側にスイングさせ屋根を敷地に収まるようにねじって繋げる。連続するサーフェスとなる屋根は垂木のスイングによって表裏が反転し都市に対して、開くインターフェイスとなっている。屋根勾配が極大になる時には建築物のボリュームが屋根を貫通し、境界に差し込まれた住む領域が街に現れる一瞬があり、屋根勾配が0、つまり壁のように立ち上がった時には屋根が純粋な境界となり、これを越境するポイントとして象徴的にデザインとして、一方は緑道と鉄道の交差点に、もう一方は都市と住居のエントランスとして利用する。

世田谷線の山下駅は小田急線との接続駅であり、乗り換え客の多い駅である。しかし、駅舎はプラットフォームのみの簡素な作りで、多くの客がプラットフォームに溢れてしまう。こんな背景から生まれた待合スペースを兼ねたカフェは世田谷線側に開かれ、都市側に領域を持っている。多くの駅がそうであるように、境界に挿入されたプラットフォームは都市の境界を見つめる貴重な経験であり、世田谷線という特殊な境界は線路を見つめながら野生動物の住む自然保護区を眺める経験となる。

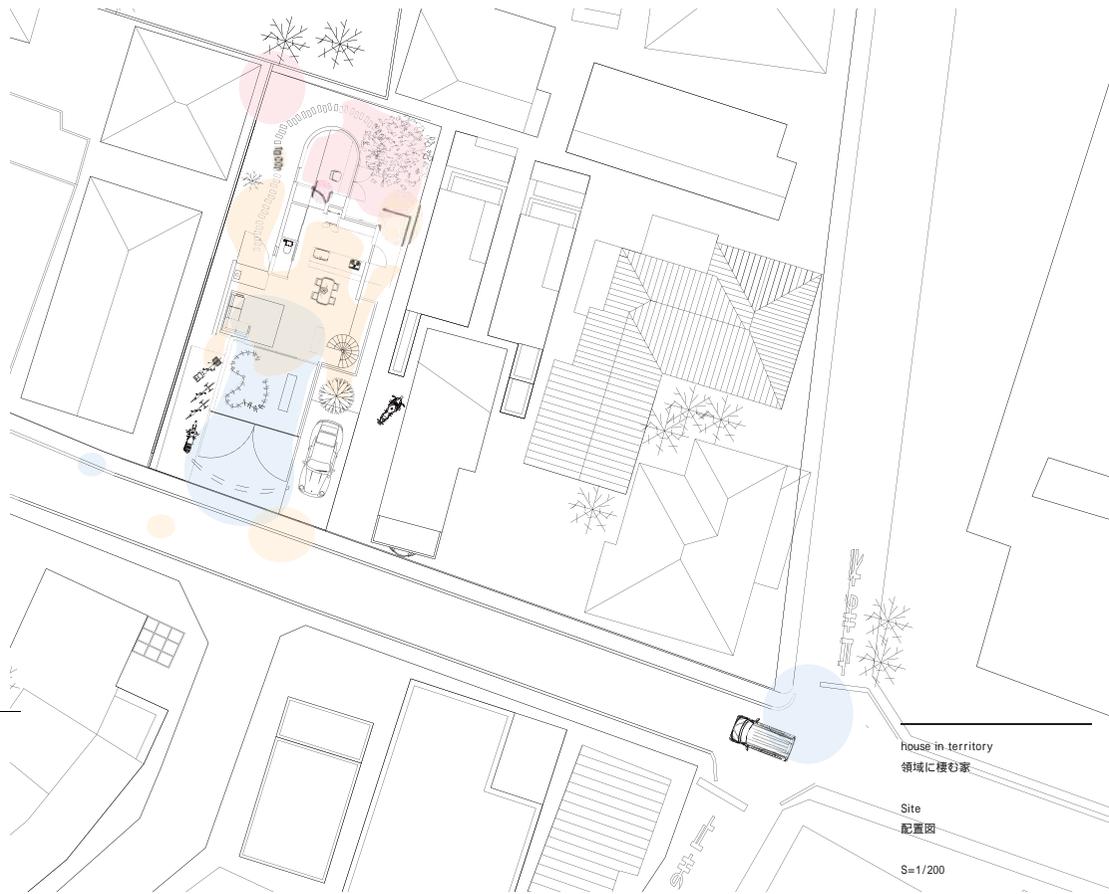
住居の設えは棟木に沿って整列し、生活は境界に沿って行われる。生活空間で表裏が反転する屋根により、2つの境界のどちらとも生活と密接な関係となる。

3つの煙突はカフェの暖炉、住宅の排気、アトリエの窯によるもので、薄い建築物の都市に対しての存在感を与えている。

この住宅は実験住宅として考え、線路内の薄く長い敷地に新たな空間を与え、両側の街と駅と駅を結びかけになる。



Site-B 領域に棲む家



house in territory
領域に棲む家

Site
配置図

S=1/200

すずらん通り商店街の道に面する商業地域 + 準防火地域の用途地域とその奥にある第1種低層住居専用地域の2つの用途地域にまたがる敷地にそれぞれの境界からセットバックさせたヴォリュームを挿入し、建築と庭を交互に挿入した。

1階のShopは住居の玄関として機能とする。これは商店街にある魚屋、八百屋、肉屋の空間を参考としており、生活空間と都市との間に、お互いが混じり合うShopを差し込むことにより、お互いが入り込む空間が生まれている。生き生きとした商店街はこの環境によって生まれている。元々、この敷地に存在していた八百屋もその空間をもってあり、通学路となっている道を通る子供たちにShopを跨ぎ、道とリビングで挨拶を交わす光景が見られていた。

住居のリビング空間は光庭と呼ばれる空間であり、横方向にも縦方向にも空間を横断する。この庭の他に外部に設計した複数の庭にはヴォリュームを結びつけるエレメント（階段、家具、庇、バルコニー、など）を張り出し、庭を外部と内部の新たなインターフェースとして、交流する空間、領域境界のインテリア化に取り組んだ。本設計では開口部に現れる建具も建築空間と外部の境界に差し込まれる領域だと考え、建具が稼働することで生まれる空間を外側に広げようとする試みや部屋の中に開かれた時にプライバシーを守る動きを起こしている。

庭となるリビングは隣接する住居と住居の境界と同一に位置している。バルコニーと机、トイレが張り出し、2つの住居の間に生活空間があふれる。庭に対して、ソファや机がみ出し、生活のシーンが家中に浸透する。そして、そのシーンはShopを通じて都市へと映し出されている。

